

若手研究者現地調査レポート

第1回：中国江蘇省



本誌では、若手の教育研究者の研究支援を目的とした新たな活動をスタートした。

研究者自身の探求テーマをより深めるために、海外の現地視察・取材を行い、

本誌にてレポートしてもらうというものだ。

その際、渡航および取材費用は編集部が負担するので、ぜひこの企画を活用していただきたい。

(BERD 特派員レポーター募集要項：Benesse 教育研究開発センターサイト

http://benesse.jp/berd/center/open/berd/tokuhain_bosyu/index.html をご覧ください)

中国と日本の子どもたちに見る 学習動機と取り組みの違い

劉雲龍 [東京工業大学大学院修士課程1年]



劉雲龍
りゅう うんりゅう

中国上海市生まれ。
早稲田大学理工学部卒業。
東京工業大学大学院
修士課程1年。
専門は教育学。

近年、日本人の学習意欲の低下について

取り沙汰されることが多いが、子どもたちの学習意識について

国際比較に基づいた検証が十分になされているとは言い難い。

そこで、新連載第1回目となる今回は、

上海出身の劉氏が中国の農村部と東京都の2か所において

学習意識についてのアンケート調査を実施した。

その比較検証から明らかになったのは、中国（農村部）の

子どもたちの学習動機・目的意識の高さであった。

はじめに

筆者は1999年秋に上海市代表に選抜されて来日し、千葉県
暁星国際高校で学んだ後、2002年に早稲田大学に入学した。
現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム
専攻の赤堀研究室に所属し、子どもの「学力」と「教育」の
国際比較というテーマで研究を進めている。

2年前、経済産業省から早稲田大学へある調査の委託があっ
た際、筆者はその一部を担当し、「競争力のある人材育成」とい
うテーマの下、日中両国の教育・企業関係者と産学連携、大学
の教育システムなどについて熱く議論を交わし、教育に対する
思い入れを強くした。また社会問題としての観点から、教育普
及問題（希望工程等*1）に対する中国政府の対応及び民間の動
きについても以前から注目してきた。恵まれた環境の中で教育

を受けることのできた一中国人として、このこととどう関わるか
真剣に考えなければならない。良い国をつくるには良い教育方
法と教育体制が必要不可欠である。たとえ自分自身が世界一の
ものをつくれなくても、世界一のものをつくることのできる人材
を育てられるのだとしたら、これに代わるやりがいはない、と筆
者は考える。日中両国の経済関係は日に日に緊密の度を増して
いるが、経済面だけでなく教育面においても両国が協力できる
ところはないだろうか、ということも常に考えている。

今回、研究の一環として、BERDの特派員となり中国での調
査を実行することができた。以下では、調査の具体的な内容に
ついて報告させていただくが、教育に携わる研究者または現場
の先生方に少しでも参考になることを願う次第である。

本比較調査を実施する社会的背景及び目的

近年、日本の子どもの学力低下問題についてさまざまな議論
がなされ、これからの時代にふさわしい教育システム及び教育
方法の開発が期待されている。しかし、それは子どもたちを取り
巻く社会状況や教育環境が常に変化していることを意識しな
がら、日本と世界の教育の現状を把握した上で提案されなけれ
ば、単なる理想論で終わってしまいかねない。

本調査研究では、「第1回子ども生活実態基本調査報告書～
小学生・中学生・高校生を対象に～」(Benesse教育研究開発

センター、研究所報、VOL.33、2005年8月／以下「子ども生活実態基本調査報告書」を基に、子どもの視点から見た「自分」と「自分の周り」、勉強に対する姿勢や目的などについて、近年目覚ましい教育成果を上げている中国（農村部）と日本（東京都）の公立中学校を比較分析することで日本の教育の現状把握を試みた。また、アンケートの結果に基づいて、日本の教育の強みや弱みを明らかにしていきたい。

ただ本調査研究は一事例研究にすぎない、ということも十分に理解していただきたい。なぜなら、社会的及び歴史的背景、文化や思想の違いなどが国の教育体制や教育方法に大きな影響を与えているからである。また、本調査に協力していただいた学校間の差も、少なからず何らかの形で結果に影響を及ぼしていることは否定できない。

調査校について

今回の調査を行った2か所について説明したい。

日本では、東京都多摩地区の公立中学校を訪ねた。この調査協力校は全校生徒約650名で、現在、地域連携の新たな仕組みづくりに全力を挙げている。学区は東西に細長く広がり、古く

から都心部のベッドタウンとして発展してきた。また、工場の進出もあって、社宅や都営団地など住民の入れ替わりが激しい地区でもあり、帰国子女も多く、生徒間での学力差は大きい。02年度より地域内における教育ネットワークを構築し、地域の人的資源を活用することで、家庭や地域社会と密接な連携を図り、学校生活の充実化及び教育改善に努めている。その結果、少しずつではあるが、生徒の学力向上、学校の活性化に成果が表れ始めている。本調査では、協力校の中から無作為に抽出した中学2年生2クラス、3年生1クラスの、計3クラスの生徒に対しアンケート調査を実施した。

中国の調査協力校は中国江蘇省農村部にある全寮制の公立中学校2校である。全校生徒約500人の2校は、それぞれ人口約35000人の町の東と西に位置し、共に市及び省（日本の県に相当）の模範中学校を目指し06年より3か年計画で学校の再建を図っている。また、この町では高校がないため、高校に進学

*1 希望工程は中国国内外の民間資金を集めることで、未だに法律で定められた9年義務教育を受けられない中国貧困地域の子どもの援助するための公益事業である。近年、貧困地域における教員研修及び教育施設の建設、教育環境の改善にも全力を挙げている。この事業は89年、中国青少年発展基金会により創設された。

●調査概要		調査対象数
調査テーマ	1) 中国（農村部）と日本（東京都）における「子どもが勉強する動機・目的及び学習への取り組み」の違いを明らかにすること 2) 子どもの視点から見た「自分」と「自分の周り」の日中間の差異を明らかにすること	中国（農村部）212名、日本（東京都）105名
調査時期	中国（農村部）2006年9月7日～9月18日 日本（東京都）2006年10月1日～10月15日	調査方法
調査対象国及び対象者	中国（農村部）と日本（東京都）の公立中学校2、3年生	アンケート調査。アンケートは「第1回子ども生活実態基本調査報告書～小学生・中学生・高校生を対象に～」(Benesse教育研究開発センター、研究所報、VOL.33、2005年8月)から抜粋し作成した。
		アンケート回収率
		中国（農村部）191名（うち2年生99名、3年生92名）、回収率90.1% 日本（東京都）94名（うち2年生63名、3年生31名）、回収率89.5%
		調査協力校
		1) 東京都多摩地区の公立中学校 2) 中国農村部にある全寮制公立中学校

図表 [1] 調査協力校(中国)のあるクラスの時間割

時間	時限	月	火	水	木	金	土	日
5:20					起床			
5:40 ~ 6:10					朝食			
6:20 ~ 6:30					整理整頓			
6:30 ~ 7:10					朝自習			
7:20 ~ 8:05	1時限	国語	英語	国語	英語	英語	選択	自習
8:15 ~ 9:00	2時限	数学	国語	英語	数学	物理	選択	自習
9:05 ~ 9:15					体操			
9:20 ~ 10:05	3時限	化学	数学	国語	公民	英語	選択	強化
10:20 ~ 11:05	4時限	英語	物理	物理	国語	化学	選択	強化
11:10 ~ 12:25					昼休み			
12:30 ~ 14:10					昼自習			
14:20 ~ 15:05	5時限	体育	英語	化学	生物	数学	選択	
15:20 ~ 16:05	6時限	読書	公民	数学	地理	作文	選択	
16:15 ~ 16:55	7時限	物理	化学	公民	英語	作文	選択	
17:05 ~ 17:45	8時限	H.R.	歴史	情報	化学	数学	選択	
17:55 ~ 18:35	9時限	国語	数学	歴史	物理	英語	選択	
18:40 ~ 19:20					入浴・夕飯			
19:25 ~ 20:10					夜自習①			
20:20 ~ 21:05					夜自習②			
21:15 ~ 22:00					夜自習③			
22:00 ~ 22:30					消灯準備			

調査協力校である中国（農村部）の中学校



授業中の風景



自習中の風景

したい生徒は毎年倍率の高い入学統一試験を受け、隣接する町や市の高校に行かなければならない。生徒が激しい競争に勝ち抜くために、2校とも1年生から受験を意識させ、教科の学力向上に非常に力を入れている。このことは、**図表1 (P.37)** で示すあるクラスの週間時間割から読み取ることができる。早朝から夕方までの密な授業配分や夜遅くまでの自習時間がその厳しさを物語っている。さらに土曜日にも授業があり、子どもによっては日曜日に学校の補習授業に参加しなければならない。

生徒に「努力は成功の源だ」と教えることは、この町の教育委員会が打ち出した方針である。しかし、この2校にとって現在最大の問題となっているのが教員不足である。いわゆる高学歴を持つ若い人材が都市部に流出しているため、この町の教育委員会は毎年教員養成の専門学校または短大出身者を多く採用せざるを得ない。本調査では、協力校2校の中から無作為に抽出した中学2年生2クラス、3年生2クラスの、計4クラスの生徒にアンケート調査を実施した。

調査結果及び考察

本調査のすべてのアンケート項目において、1～4段階（①全くそう思わない、②あまりそうは思わない、③まあそうだと思う、④とてもそうだと思う。または、①全然満足していない、②あまり満足していない、③まあ満足している、④とても満足している）で日中の協力校の子どもに回答してもらった。以下

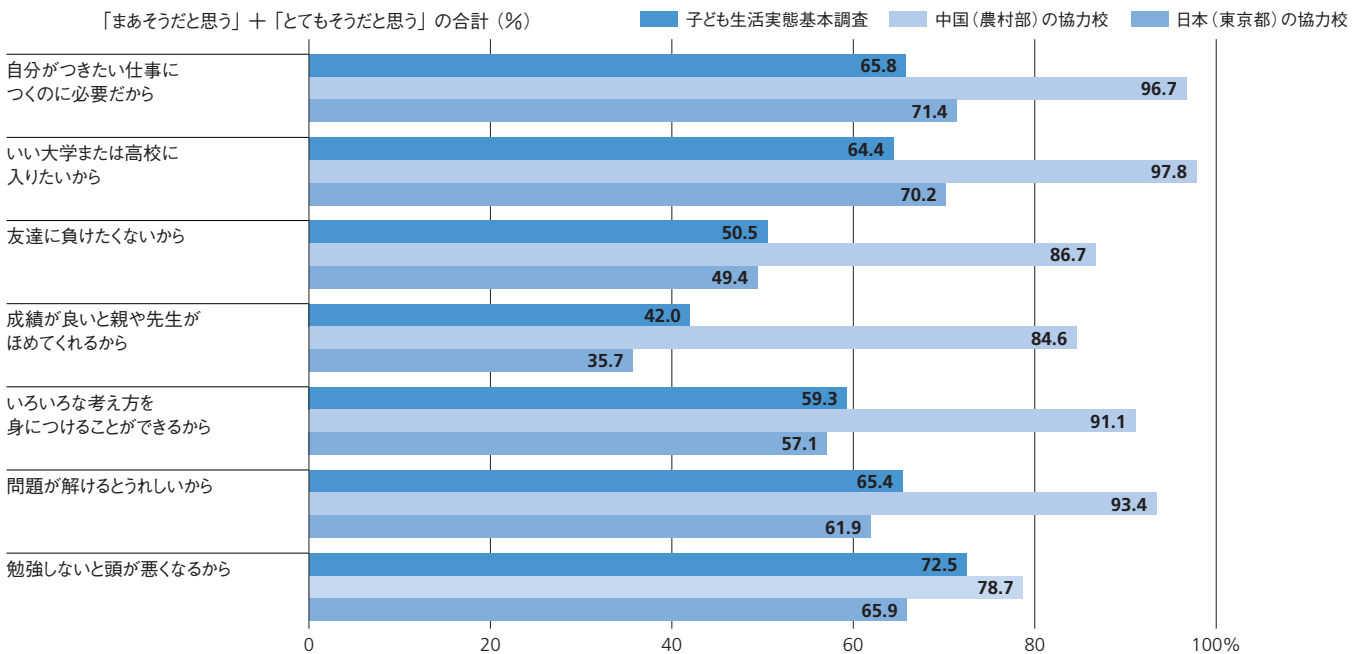
に示す調査結果に関する**図表2～4**のグラフの各項目は、上から順に、「子ども生活実態基本調査報告書」の中学生のデータ*2、中国（農村部）の協力校のデータ、日本（東京都）の協力校のデータを示している。

●勉強の目的や動機について

子どもが勉強する目的や動機について、**図表2**で示す7項目を質問し、調査結果を分析したところ、すべての項目において、中国（農村部）の調査協力校は最も高い数値となった。また、「子ども生活実態基本調査報告書」と日本（東京都）の数値はほぼ同じ傾向を示していることも分かった。

中国（農村部）の調査協力校の子どもが勉強する理由は回答の多い順に「いい大学または高校に入りたい」「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」「問題が解けるとうれしいから」となっている。「いい大学または高校に入りたい」の回答者が多いという点に関しては、日本以上に高校受験が厳しい中国（農村部）の社会的背景もあり、子どもがそのプレッシャーを感じていることは、97.8%という数字に顕著に表れている。また、中国（農村部）の子どもは自己実現のために勉強していることも「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」という項目で96.7%と肯定的な回答が多いことから分かるだろう。さらに、「問題が解けるとうれしいから」「いろいろな考え方を身につけることができるから」といった学ぶ楽しさと関連した理由も、中国（農村部）の子どもは真剣に勉強に取り組んでいるこ

図表 [2] 質問「あなたが勉強しているのは、どうしてですか」



との表れであるといえよう。

一方、日本の子どもが勉強する理由としては、「勉強しないと頭が悪くなるから」「いい大学または高校に入りたから」などの項目において回答数が多かった。また、「成績が良いと親や先生がほめてくれるから」という項目で低い数値を示していることから、日本（東京都）の子どもはほめられるから勉強しているのではないことが分かった。さらに、「友達に負けたくないから」という項目でも日本（東京都）は、約5割のやや低い数値を示している。これは、日本（東京都）の子どもは中国（農村部）の子どもに比べ、勉強における競争心があまり強くない、ということの表れだと思われる。

●勉強の取り組みについて

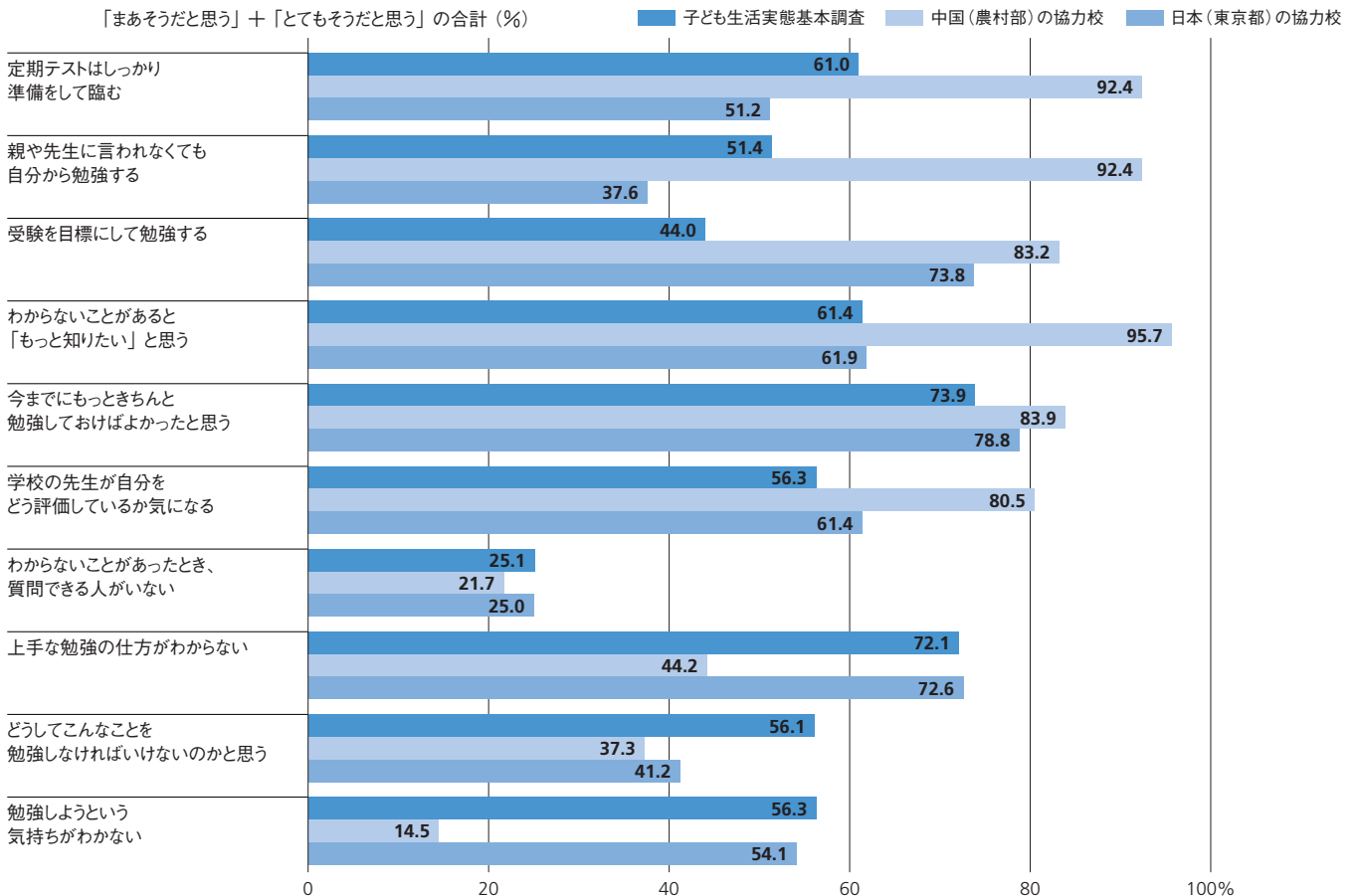
図表3の「勉強しようという気持ちがわからない」「上手な勉強の仕方がわからない」などのデータからは、日本（東京都）の子どもは中国（農村部）の子どもに比べ、学習に対する否定的な気持ちを持つ割合が高いことが分かった。このことから、日本の子どもは学習への取り組み方が分からなかったり、戸惑いを感じたり無気力になっていることを読み取ることができる。

また、興味深いことに「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という質問項目においては、中国（農村部）＝37.3%と日本（東京都）＝41.2%では大きな差がなかった。今の勉強は何の役に立つのかといった、受験に対する疑問は日中の調査協力校の子どもではあまり変わらないように思われる。しかし、中国（農村部）の子どもは受験体制に対する疑問を持っていながらも、将来のこともある程度考えた上で一生懸命勉強している、と筆者は考える。このことは、図表2の「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」という項目で、中国（農村部）の調査協力校は96.7%と肯定的な回答が多いことから説明できるかも知れない。

また、「定期テストはしっかり準備をして臨む」「親や先生に言われなくても自分から勉強する」といった自律的かつ積極的な勉強の取り組み方に関する項目においても、中国（農村部）の調査協力校から9割を超える肯定的な回答が得られた。さらに、ここで注目したいのは「わからないことがあると『もっと知りたい』と

*2 「子ども生活実態基本調査」は、中学1年生～3年生(4550名)のデータ

図表 [3] 質問「あなたは勉強の取り組み方について、次のようなことがあてはまりますか」



い』と思う」という質問項目である。これは、子どもが学ぶための原動力ともいえる好奇心を持つかどうか、ということに関する調査である。中国（農村部）＝95.7%と日本（東京都）＝61.9%の差から、勉強に対するモチベーションの違いが読み取れる。このことは「親や先生に言われなくても自分から勉強する」中国（農村部）の子どもが多いということと、因果関係にあるかも知れない、と筆者は考える。今後どのような教育方法でどのように子どもの好奇心を高めていくかは、日本の学校または家庭にとって大きな課題だと思われる。

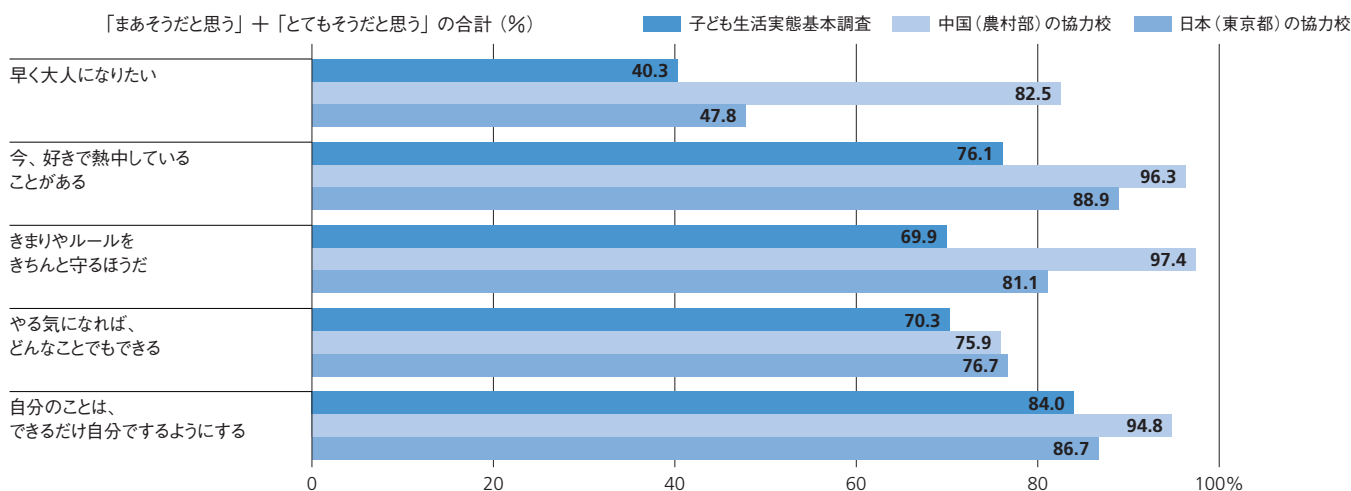
●子どもの視点から見た自分

肯定的な自己像について検討するために、図表4に示す5項目に回答してもらった。その結果、「子ども生活実態基本調査報告書」においても、今回の調査協力校においても、中国（農村部）との差が多少見られたものの、約7割以上の子どもが「自分のことは、できるだけ自分でするようにする」、「今、好きで熱中していることがある」、「きまりやルールをきちんと守るほうだ」と答えた。日本（東京都）においても中国（農村部）

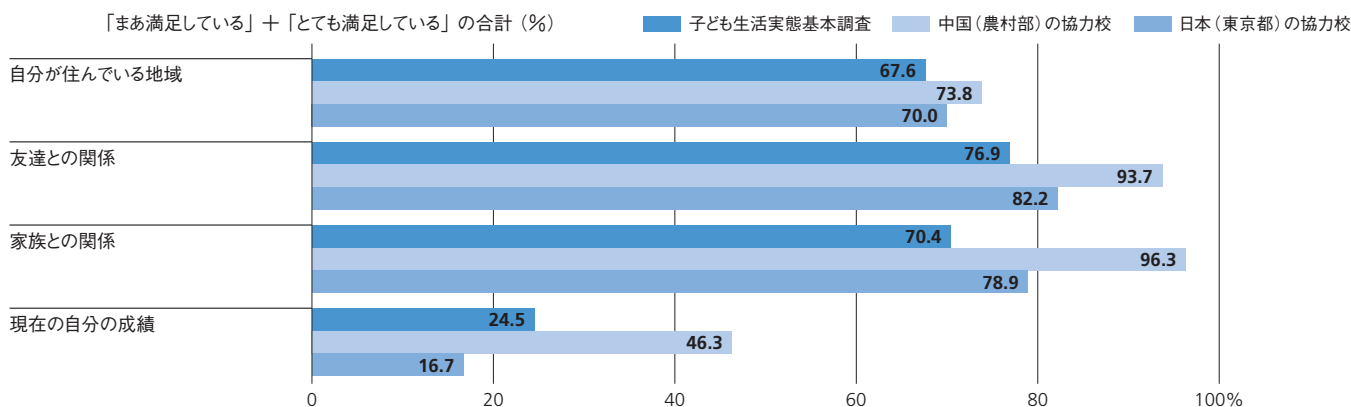
においても自分に対して肯定的な自己像をしっかりと持っている子どもが多いと思われる。

しかし、「早く大人になりたい」という項目に関しては、8割が肯定的な見方を持っている中国（農村部）の調査協力校に対して、「子ども生活実態基本調査報告書」と日本（東京都）の調査協力校では、肯定的な回答は5割未満と大きく差が出ている。このことについて、筆者は以下のように考察した。本調査における中国の調査協力校は農村部に位置しており、中国では地域による経済上または生活上の格差が非常に大きいため、農村部の子どもは早くから自分の将来のことを考えて、豊かになりたいという強い気持ちの下で暮らしていると思われる。「早く大人になりたい」と思う子どもの割合が82.5%と高いのは、中国の農村部に住む子どもの純粋な心の表れかも知れない。一方、都市部または日本のような豊かな社会において、子どもは現状に満足し、大人になるということに対する憧れが薄れていく傾向がある、と考える。もちろん、「早く大人になりたい」と思わないことに関して他にもいろいろな要因が関係している

図表 [4] 質問「あなた自身のことについてお聞きします」



図表 [5] 質問「次のようなことについてどの程度満足していますか」



思われるので、さらなる検討が必要であろう。

● 周りの環境への満足度について

図表5は子どもの満足感について示した。「家族との関係」「友達との関係」「自分が住んでいる地域」の3項目において、中国（農村部）の調査協力校は最も高い割合で肯定的な回答が出ており、日本（東京都）の調査協力校と「子ども生活実態基本調査報告書」でも肯定的な回答がほぼ7割以上得られた。したがって、今回の調査校において子どもは自分の周囲に対する不満をあまり持っていないように思われる。

一方、日本（東京都）の調査協力校で割合が低いのは、「現在の自分の成績」という項目である。「子ども生活実態基本調査報告書」によると、わずか2割程度しか自分の成績に満足していない。しかし、受験競争が激しいとされる中国（農村部）で、ほぼ半数の子どもが自分の成績に満足しているのはなぜだろうか。これは、中国（農村部）の子どもは、日本（東京都）の子どもに比べ、自己肯定感が高いからではないかと推測する。

まとめ

- ①中国（農村部）の学校教育は子どもに長時間関与している。
- ②中国（農村部）の子どもは、内発的かつ外発的な要因による学習動機が極めて高い。学習目標も明確である。
- ③中国（農村部）の子どもは日本（東京都）の子どもに比べ

て、競争心、または将来に対する不安や憧れから、自発的に勉強するようにしている。

- ④日本（東京都）の子どもは中国（農村部）の子どもに比べ、成績の評価をかなり気にしている。

上記4点に関して、筆者は調査校間の違いを事実として読者の皆様に伝えるだけであり、日本の「ゆとり教育」に対して批判するつもりはまったくない。そもそも、中国国内においても、「応試教育」（科挙に似たような受験対応の教育方式）と「素質教育」（生きるための力を身に付けてもらうようなゆとりのある教育方式）に関する議論が白熱している。また、地域による教育格差及び大学生の「就職難」の問題なども、中国の教育界が抱えている深刻な問題である。

しかし、他国の長所を学び活かして、自国の短所を補うという意味では、国際比較調査を実施する意義がある、と筆者は主張する。また、互学互習ということで教育分野における日中または日本と世界との交流は極めて重要であり、筆者も今後こういった交流を有効に活用し日中の教育に対する適切な提言をしていきたいと思う。

Reference

- 『第1回子ども生活実態基本調査報告書～小学生・中学生・高校生を対象に～』VOL.33/Benesse教育研究開発センター、研究所報/2005年
- 『生きるための知識と技能2～OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2003年調査国際結果報告書～』国立教育研究所編/ぎょうせい/2004年
- 『特色ある学校づくり～学校ブランドの創造～』佐藤晴雄他/第一法規/2004年

指導教員より

赤堀侃司 [東京工業大学教授]

劉君は、東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻で、私の研究室に所属する学生である。本報告を行うきっかけは、劉君が、中国上海からの留学生であり、高校生の時から来日しているので、日本と中国の両方の文化を理解していること、日本人大学院生と同じレベルの日本語の読み書きができ、研究能力があること、日本の中学校で数学の学習指導の支援を行っていることなどの、条件が重なったことである。

本報告の趣旨は、学力の比較であった。実際に、国際学力比較である、TIMSSとPISAの問題から取捨選択して、測定を行った。そのテスト結果については膨大になるので割愛するが、その背景となる、アンケート調査を中心に報告している。どのような調査を行うか、分析をどのように行うか、どのような考察をするか、など何回も打ち合わせをしたが、その調査結果は、極めて興味深い。

中国は激しい受験競争にあり、訪問した中学校は中国の農村部ではよく見受けられる全寮制の学校である。本文中の厳しい時間割に見られるように、中国の中学生は、猛烈に勉強する。その比較では、日本はゆとりがある。中国の中学生は、その外発的な要因もあるが、極めて学習動機が高い。私も、広州、長春などの学校も訪問したが、教育理念や教育方法は同じであり、学習動機で

はアンケート結果と同じ印象を持った。

分析の詳細については、報告を参照していただきたいが、いくつかのコメントをしたい。一つ目は、国民の文化差があるので、数値については、傾向のレベルとして捉えていただきたいという点である。日本の中学生の数値については、Benesse教育研究開発センターの全国調査の数値とほとんど近似しているので、妥当性は高いと考えてよいであろう。しかし、中国の中学生がこの数値に代表されるのではなく、結果は傾向を示すものとして捉えたい。ただし、私がいくつかの中国の学校を訪問したさいの印象と、極めて近いことは確かである。

二つ目は、日本の中学生は、ある程度自信は持っているが、成績などを気にしていることや、将来について何かしらの不安を持っているという傾向がある。成熟した日本と、急速な発展を続けている中国の差もいえるが、日本人は、中学生も大人も、成績や数値を気にしすぎるとは思えないだろうか。本当の意味での「ゆとり」があればいいと感じた。

テスト結果とアンケート結果の関連については、研究として別途報告したいが、今回のようなチャンスを与えていただき、心から感謝申し上げたい。